

CT等にてS7HCC破裂による出血性ショックと診断し、緊急血管造影下に選択的肝動脈塞栓術(TAE)施行。精査にてS4 S5 S8 S7にHCCを認め、TAE17日後に肝S7,5,8及びS4部分切除、横隔膜合併切除を行った。経過は良好であった。破裂するHCCに対し、肝動脈内抗癌剤注入(TAI)+TAEのみでは再破裂の可能性もあり、また5cm以下のHCCには術前TAEの有効性は示されていない。今回障害肝の肝切除を考慮し選択的にTAEを行ったことで、肝機能が保たれ良好な術後経過を得られた。

### 9. 巨大HCC切除例の検討

田崎健太郎, 山本 宏, 渡辺一男  
浅野武秀, 本田一郎, 永田松夫  
滝口伸浩, 早田明浩, 藤本浩二  
松永晃直

(千葉県がんセンター・消化器外科)

1984年9月から2002年5月までに当センターにて手術施行したHCC138例のうち、腫瘍径が10cmを越える16例を対象とし、腫瘍径・生存期間・再発形式などにつき検討した。

女性5例, 男性11例, 平均56.4歳。感染症はHCV3例, HBV/HCV重複感染1例, 感染なし8例, 不明4例。最大腫瘍径は平均131mm(100-240), 腫瘍数は1個5例, 2個4例, 3個以上7例。術前ICG-R15は15%未満12例, 40%未満2例, 40%以上1例, 不明1例であった。バイオポンプ使用例は2例で、手術時出血量は平均5436gr(843-30000), 術後合併症を7例で認めた。非癌部所見はNL9例, CH/LF5例, LC2例。13例で再発(残肝11例, リンパ節1例, 肺1例)を認め、再発までの期間は平均10.6月, 平均生存期間は32.1月, 10例が原病死, 1例が他病死, 再発生存が3例, 無再発生存が2例であった。

### 10. ICG15分値不良原発性肝癌患者に対する手術適応について

海保 隆, 田中寿一, 土屋俊一  
柳沢真司, 竹内 修, 岡田大介  
鈴木文子, 橋場隆裕

(君津中央・外科)

三浦正巳(同・総合診療科)

三枝奈芳紀(三枝病院)

PEIT, TAE, RFAなど原発性肝癌に対する治療の選択肢が増え、小肝癌、多発癌などではこれらの非切除療法が一定の治療効果をあげている。しかし、大型肝癌では現時点では切除が最も確実な治療手段であるにもかかわらず、肝予備能不良のため断念している症例も多い。術前の肝予備能評価として最も一般的な

ICG-R15は肝血流や胆汁排泄の影響を受けるため、その評価に注意が必要である。当施設ではICG-R15に加え、ガラクトース負荷試験(GaTT-T/2)による術前肝機能評価を行っており、基本的にはICG-R15が不良でもGaTT-T/2が保たれていれば切除をする方針である。平成7年4月~平成14年5月までに60例の原発性肝癌に対し肝切除を施行した。うち、ICG-R15が30%を越える症例が11例、兵庫医大山中らの予後得点50点以上の肝切除は12例あったが、これらの肝機能不良群で術死在院死は1例、他は耐術可能であった。

### 11. 肝切除により肝性昏睡の改善を見た肝内A-Pシャント症例

小林 進, 落合武徳

(千大院・先端応用外科学)

(はじめに)肝内Arterio-Venous Malformationを原因とするArterio-Portal(A-P) Shuntは稀な疾患であるが、食道静脈瘤合併症例に対しては治療として肝動脈塞栓療法(TAE)が試みられることが多い。しかし、TAEが不十分であると、再疎通による食道動脈瘤の再発、逆に過度となると肝管炎から敗血症、さらに急激な血行動態の変化から門脈内血栓形成から肝不全へと重症化する症例が存在する。今回、食道静脈瘤破裂、肝性昏睡を主訴とした肝内A-P Shunt症例に対し、肝切除術を施行し食道静脈瘤の消失、肝性昏睡の改善を見た1例を経験したので報告したい。(症例)症例は60歳、女性、食道静脈瘤破裂により、近医にてTAEを施行し、一時的に止血しえたが1ヶ月後、再吐血を起こす。2度目のTAEを施行し、止血しえたが、その1ヶ月後、肝性昏睡状態に陥る。保存的治療により、意識レベルは改善し、根治治療を目的に当院へ紹介入院となる。Digital Arteriography等により、肝S8亜区域にA-P Shuntが存在し、門脈血流は遠肝性を示し、食道静脈瘤、門脈内血栓が認められた。手術はS8グリソンを結紮し、肝S8亜区域切除を行った。肝切除終了後、術中ドップラーエコーにより、門脈血流は求肝性となったことが確認された。術後の内視鏡にて食道静脈瘤の消失が確認され、肝性昏睡も改善し、現在は家事、買い物が可能となり、QOLは著明に改善している。

(結論)食道静脈瘤を伴う難治性A-P Shunt症例に対して、A-P Shuntを含む肝切除は食道静脈瘤の根治性、肝機能の改善の面からも選択されるべき治療手段と考えられた。